

# MUSASHINO<sup>Vol.87</sup> *for* TOMORROW

● 巻頭 ●

才能なき者、努力するのみ

● 海外音楽事情 ●

ハチャトゥリアンの薫陶を受けて



October 2008  
vol.87

# 才能なき者、 努力するのみ

有森裕子 ● 元マラソンランナー、  
(株)ライツ取締役、NPO「ハート・オブ・ゴールド」代表



有森裕子  
(Yuko Arimori)

1966年岡山県生まれ。就実高校、日本体育大学を卒業して、リクルート入社。'92年バルセロナオリンピック、'96年アトランタオリンピックの女子マラソンでは銀・銅メダルを獲得。'07年2月、東京マラソン2007でプロマラソンランナーを引退。'98年、NPO「ハート・オブ・ゴールド」設立、代表就任。'02年、アスリートのマネジメント会社「ライツ」設立、取締役就任。現在、国際陸連 (IAAF) 女性委員、日本陸連理事、国連人口基金親善大使、他。米国コロラド州ボルダー在住。

1992年バルセロナで銀、1996年アトランタで銅。日本女子陸上界初となるオリンピック2大会連続のメダリストという快挙をなし得ながら、「私には世界をめざす才能がなかった」と語る有森裕子さん。その意味するところは？ 昨年現役を引退された名マラソンランナーに、ご自身の競技人生を振り返っていただきお話を伺いました(本文はインタビューをもとに構成しており、文責は編集部にあります)。

## 頑張り続けられるもの

「運動するより、どちらかといえば絵を描いたり、物を作ったりすることの方が好きだった」という子供時代。勉強ができ、何でも器用にこなす2歳上の優秀なお兄さんに比べ、何をやるにも時間がかかり、不器用でうまく行かない自分はダメなんだと決めつけていたという有森さん。そんな少女の有森さんを勇気づけたのは、小学校の体育教師だった安藤先生の「自信の無いことも、短所も、みんなお前だけの素

晴らしい特徴なんだ。武器なんだ。有森は頑張れる子だから、ずっと頑張り続けられるものを見つけなさい」という言葉だった。

その頑張り続けられるものとの出会いは、中学に入り唐突にやって来た。体育祭での800m競走だった。

「みんなが敬遠する種目でした。普段注目されることのなかった私は、何の自信もないまま、これなら目立てるというだけの理由で立候補して出場。そしてなぜか優勝。3年連続して出場し、3回とも優勝しました。これはとてつもなく大きな自信になりました。トップでテープを切る爽快感、やれば出来るというものを見つけた喜び。スポーツの結果は一目瞭然。誰にもわかるカタチで評価されたことは、何より嬉しかったですね」

そして有森さんは高校進学後から本格的に陸上に打ち込むことになる。

## いつかは オリンピックに

「走る」ことに光明を見つけたもの

の、もともと有森さんは陸上選手にとってのハンディを身体に抱えていた。先天性股関節脱臼という障害をもって生まれ、その矯正のために付けたギプスのせいでO脚となり、さらに小学校時代の交通事故による左足骨折の後遺症もわずかにあった。加えて貧血という持病も。結局、高校、大学時代を通じてこれといった実績は残せなかった。

「就実高校時代、私なりに努力したものの、国体にもインターハイにも縁がなく、一番のハイライトである駅伝でも常に補欠。3年生の最後の大会でも補欠だったときは、これしかないと思って頑張ってきた陸上だけれども、私には向いていないのでは…。『やめたい』ではなく『やめないといけないのでは』とさえ思いました。でも恩師、狩屋先生の『頑張っていた有森を走らせてやれなくて辛かった』という言葉聞き、監督が私をちゃんと見てくれていたということに大感激して、もう一踏ん張りしてみようという気になったのです。

日本体育大学でも、記録は鳴かずとばずでした。でも4年生のときに開かれたソウルオリンピックで、女子マラソンのロザ・モタ選手(ポルトガル)の笑顔のゴールシーンに強烈な印象を受け、オリンピックという舞台を意識するようになりました。もっともっと頑張っ、いつかは私も世界中の人々を感動させられる場に立ちたいという目標を持ったのです」

## 気持ちの素質は 世界一

1989年、大学から実業団リクルートランニングクラブへ半ばおしか



▲'96アトランタオリンピック  
銅メダルのゴール (Photo by AFLO)

け入部。まわりは学生時代に実績を残したエリートばかり。当然練習では常にチームメイトの後塵を拝し、付いて行くのがやっとのありさま。しかし、全力で諦めずに食らいついてゆく有森さんを見て、名伯楽・小出義雄監督は「身体の素質はゼロ、気持ちの素質は世界一」と評したという。

「練習に関しては、すべて全力。与えられたメニューは、うまく出来ようが出来まいがとにかく全力でこなす、それを徹底しました。ただ、最初は周りに比べて弱かったので、手の抜きようがなかったというのが本当のところ。それにもともと不器用で、力をうまくコントロールできなかったという部分もあります。全力でどこまで“持つ”か、その“持つ”ポイントをどこまで伸ばせるか、日々それとの闘いでした」

こうした努力が実を結んだのか、高校からの地道な練習の成果が花開いたのか、翌'90年の大阪国際女



▲武蔵野音楽大学江古田キャンパス

# 才能なき者、 努力するのみ

子マラソンでは、初マラソンの新記録で6位入賞。さらに、'91年の同大会では、2位ながら当時の日本最高記録を樹立。この快挙に、小出監督いわく「駄馬がサラブレッドを追い越した」

けて理解をしたうえでないと、中身が抜けたままの練習になってしまうと思います」

## “強さ”と “やさしさ”

### 何のための 練習なのか

月間1,000km以上はラクに走ったという過酷なリクルートでの練習。どんな練習にも常に全力で臨んできたという有森さんだが、与えられたメニューをただ黙々とこなしたわけではなかったという。

「リクルートに入ってから急速な成長は、環境や練習量、練習メニューなどすべてが最高の中でもまれた結果だと思います。ただし、闇雲に全力でメニューをこなしていたわけではありません。私は、練習メニューを与えられたとき、いつも監督やコーチに『この練習は何を目的としているのか？ このメニューをやる意味、やる趣旨は？』ということを尋ねました。答えを聞いて、すべて納得したうえで、理解したうえでないと受け入れることが出来なかったのです。

歌や楽器の練習も同じなのではないでしょうか。自分が何のために時間を使い、何のためにこうした練習をしているのか、それを問いか

東京世界陸上での4位入賞が評価されて、有森さんはついに念願のオリンピック出場を決めた。'92年バルセロナオリンピック。今でも語り草となっているロシアのエゴロワ選手との火の出るようなデッドヒートの末、敗れたものの見事に銀メダルを獲得した。

この大会で有森さんは銀メダルの他にもう一つの栄誉に輝いている。それは「フェアプレー賞」。エゴロワ選手との熾烈な争いの真っ最中、最後の給水所で手にしたスペシャルドリンクのステンレスボトルを、周りに配慮して投げ捨てることなく道の脇にそっと置いたシーンが対象となった。

「正直言って、特別なことをしたという意識はありません。その前の給水所で同じボトルを軽く放ったときに凄い音がして皆が驚いたのを覚えていて、最後の給水所のところは道が狭いし、坂だし、観衆が大勢いたので、逆に投げるなんてことの方が思いもよらなかったんです」

しかし極限の中で、周りへの思

平成19年度  
大学院修士課程修了生による  
研究演奏会  
(2008年6月11日/津田ホール)



高橋奈津子(ピアノ)



仲村亜寿実(ピアノ)



松中哲平(バス)



塩崎めぐみ(メゾ・ソプラノ)



井上 茜(ピアノ)

いやりが発揮できる人は本当の意味でやさしさを身に付けている人ではないだろうか。

「レース中にライバルである私にスポンジを渡してくれたカトリン・ドーレ選手(ドイツ)、自分は腹痛でレースを棄権しながら日本人選手の勝利を心から祝福してくれたロザ・モタ選手。強い人はやさしい心を持っている、彼女たちを見れば自然とそう思えます。でも、強さからの余裕でやさしいのか、やさしい人が強くなれるのか、それはわかりません。ただ、人柄は必ずパフォーマンスに出てきます。ある程度のレベルに行けば、自然と礼儀正しさとか人への配慮は生まれてくるのではないのでしょうか」

## 自分で自分をほめたい

バルセロナ以後、自分の考えと周囲とのギャップや足の故障などで走れない時期が続いた。思い切った両足かかとの手術を経て、'95年の北海道マラソンで復活。そして'96年、2大会連続の出場となったアトランタオリンピックにおいて、またもやエゴロウ選手と激闘を繰り広げ3位でゴール。ゴール後のインタビューで発した「自分で自分をほめたい」は、この年の流行語大賞に選ばれるほど世の中に広まった。

「あの言葉は、単に銅メダルだけに対してのものではありません。アトランタは、バルセロナ以降の4年の間に、これからの人生やメダルを取ることを意味など考える中でいろいろな葛藤があり、湧いた疑問を解決するために絶対にメダルを取るんだと自分に課して出場した大会でした。それを自分に出来る最高



▲入間キャンパス

の走りで実現できたことに対して、素直に出てきた言葉でした」

日本の女子陸上選手では初となるオリンピック2大会連続のメダル獲得。その快挙をなし得た要因についてこう語る。

「諦めなかったから、しつこかったから…。それはそのまま私が不器用だからということにつながると思います。人より努力しないと自分はダメになる、そういう危機感を常に持っていました。高校・大学時代の成績が物語るように、世界の舞台を目指す才能や素質が私にはありませんでした。『才能なき者、努力するのみ』です」

## スポーツとアートと音楽

走ることは好き嫌いではなく、あくまで仕事だったという有森さん。本当に好きなのは、絵を描いたり、音楽を聴いたりすること。スポーツ、アート、音楽——アスリートならではの視点から、この3つは全部つながっていると指摘する。

「スポーツには、動きやパフォーマンスを描く能力がないとダメだし、もちろんリズム感も必要です。頭の中に描いたイメージを、いかに現実のものにしていくか。スポーツ、アート、音楽はベースの部分でつながっていると思います。表現する、伝



▲入間キャンパス



5

えるという意味で変わりはないのではないのでしょうか。アフリカの選手の躍動感あふれる動きには、まさに音楽が感じられます。ちなみに私は、気持ちを落ちつけたいとき、リラックスしたいときに音楽を流します。現役時代によく聴いたのはEnya。最近では主人の影響でクラシックを聴く機会も多いですね」

## 常に努力、常にチャレンジ

アトランタオリンピックの前年、かかとの手術のあと、有森さんは他の患者さんと一緒にリハビリをしながら感じるがあったという。

「私にとっては、走れるようになるためのリハビリでした。でも、一般の方々は、普通の生活に戻るために懸命にリハビリをしているのです。私の悩みなど、贅沢なものでした。治れば走れる、頑張れるチャンスがある。だったらやらないといけない、そう感じました。実は日体大陸上部の同級生が二人、若くして志半ばで亡くなっています。彼らのことを思えば、生きているから頑張れる、頑張れることの幸せ、走れることの幸せを思わずにられません」

最後に、音楽を学ぶ我々にメッセ

ージをいただいた。

「自分がやっていることに対して、自分自身が喜びと感動を持っているか、常に問いただす姿勢が必要だと思います。ただ吹くだけ、ただ弾くだけで自分が何も感じていなければ、音は人に届かないでしょう。私が走ることでそうしてきたように、音楽を通してとことん自分と向き合い、明確な夢を描いてください。そして、その夢を絶対に諦めないこと。才能や素質がないなら、ないなりに頑張ればいい。頑張った自分を確認できれば、それが自信になります。どうか『自信過剰』になってください。自信が過剰になるくらいやり抜いてください。すぐに結果が出なくても、自分なりにやったということを実感して次に進むことが大事。そうした中で揺るがない夢や目標を持てば、それがいつかカタチになります。とにかく挑戦すること。機会あるごとにチャレンジする気持ちを持ち続けてください」



▲入間キャンパス

才能なき者、  
努力するのみ

## 音楽余話



## 誰だかわからなかったが、言うままに指を動かしたモシエレス

その声は、こんなふう聞こえてきたという。

「そう、そう（一段と声を強めて）、それで、いいんですよ！

そのほうが、ずーっと、モシエレスらしいもの！」

そうして、出来上がったのが、彼の有名なエチュードだったという。 千蔵八郎

## 海外音楽事情

# ハチャトゥリアンの 薫陶を受けて②

コンスタンティン・シロウニアン教授(ピアノ)

ハチャトゥリアンから学んだこと、ハチャトゥリアンの思い出、シロウニアン先生が自らの師について語ったお話の後編をおとどけします。今回は、作曲技法のポイントや音楽を学ぶ者へのメッセージなど、音大生として傾聴すべき事柄にもふれられています。

### 第1位を病床に報告

私がモスクワ音楽院の博士課程を修了するころ、ハチャトゥリアンは高齢のために学校に出て来られなくなり、私を含む弟子たちが彼のクラスを代講するようになりました。同時に私自身も作曲を続け、ピアノのための「コントラスト」という曲集をコンクールに出して1位を獲得しました。この時、ハチャトゥリアンはすでに病床にあって、聴きには来られず、私は病院にお見舞いに行き、受賞を報告し、枕元で長いこと会話したのを覚えています。

彼はその後間もなく亡くなりました。2ヵ月後、そのコンクールの受賞披露の演奏会があり、私も受賞作をオペラホールで演奏しました。さらにその後、彼に捧げるためにヴァイオ

リン、チェロ、ピアノのためのトリオ作品を書きました。12音技法も使った作品です。

ところで、シCHEDリンという作曲家を御存じでしょうか？ バレリーナのマヤ・プリセツカヤのご主人としても知られていますが、彼は私の作曲活動をずいぶん支援してくれました。私をフェイギン兄弟\*に紹介してくれたのも彼です。ずっと後になって、コンクールの受賞者たちのガラコンサートがあったのですが、その時、私は彼らと一緒にそのトリオを共演したのですよ。

\*フェイギン兄弟：ロシアの高名なヴァイオリン奏者グレゴリー・フェイギン(現武蔵野音楽大学客員教授)とチェロ奏者ヴァレンティン・フェイギンの両氏。

### 作曲技法における 構築的センス

私自身も作曲を指導して経験したのですが、才能ある生徒たちがしばしば、素晴らしい旋律の断片を幾つも持ってきます。でも肝心なのはそれをどう展開させ組立てるかという技術であり、それがとても難しい事です。つまり曲を構築するというこ



コンスタンティン・  
シロウニアン

(Konstantin Sirounian)

モスクワ音楽院にてピアノ・作曲の両博士号取得。作曲はハチャトゥリアンに師事し、彼の最後の教え子となる。その後モスクワ音楽院にて、ハチャトゥリアンを始めとする多くの教授のアシスタントとして作曲とピアノを指導する傍ら、コミタス音楽院においてピアノ科及び作曲科の教授を務める。全ソビエト作曲コンクールにて、ピアノ曲集「コントラスト」で第1位を受賞。1988年、アメリカ合衆国に移住。南カリフォルニア大学教授を務め、同時にアメリカとヨーロッパ各地にて演奏、指導の両面に活躍。Music International Connection主宰。国際音楽指導者連盟副会長。'06年より武蔵野音楽大学客員教授。



▲シロウニアン先生演奏会  
(2006年5月、ベートーヴェンホール)

●  
表  
紙  
の  
顔  
●



グレゴリー・フェイギン教授 & エレーナ・アシュケナーズ教授

ロシア出身の両教授はご夫妻で、1995年に武蔵野音楽大学に着任して以来、熱心に本学学生の指導に当たり、今や武蔵野にとって重要な存在です。

G.フェイギン教授は、モスクワ音楽院でD.オISTRAフに師事し、'61年ブラハ国際コンクール大賞受賞。I.ジュコーフ、V.フェイギンと共にアレンスキー・トリオを結成、パリにて大賞受賞。ロシア内外での演奏活動に加え、ロシアのヴァイオリン音楽全集の録音等で活躍しています。

E.アシュケナーズ教授は、モスクワ中央特別音楽学校にて、著名なピアニストの兄ウラディーミルと同様、ジナイダ・スンバツィアに師事。また、グネーシン音楽教育アカデミーにて、A.ヨヘレスに師事しました。ロシア音楽コンクール第1位、'75年サンクト・ペテルブルク室内楽コンクール第1位を受賞。オーケストラとの共演やソロピアニスト、室内楽の演奏家として活躍しています。

お二人は、大学主催の演奏会だけでなく、全国各地で演奏会や公開レッスンをを行い、好評を博しています。

両名ともに本学客員教授。

と。いかに展開させるかというプロセスです。古典のソナタでも、提示部、展開部などの構成とバランス感覚がとても大切です。そうした構築的なセンスが、作曲技法の大切なエッセンスなのです。

ハチャトゥリアンは、特定の技法を利用することはあっても、それに支配されないようにと言っていました。たとえば当時は12音主義などがブームでしたが、そうした枠に縛られないように、と。必要ならそういった技法を使っても良いが、あくまでも和声や旋律を含む自然な音楽に彩りを添えるためのものとして、あるいはどこか別の所に向かうための手段として取り入れるべきだ、と。

もちろん、それでもわれわれは、他の作曲家の影響を受けるということは大いにあります。私自身も、たとえば、印象派の作曲家やあるいは南米の作曲家の影響や生まれ故郷グルジアの民俗音楽、民謡の影響も受けました。グルジアの音楽と言うのはポリフォニックな特徴があるのです。そういう要素がいろいろに混じり合っています。私がピアノ協奏曲を書き始めた時も、ハチャトゥリアンは、あまり細かいことは指示せず、次に進むべき方向性のようなことを示してくれました。

## 古典を学ぶことの大切さ

ここ3年は武蔵野でピアノを指導していますが、ここはカリキュラムも充実していますし、学生たちや同僚の先生方とともに良い関係を築くことができ、幸せに思っています。学生たちは、一人ひとり能力も個性も

様々ですが、それぞれが自分の能力を最大限発揮して、自分自身の解釈や演奏法を模索しなくてはなりません。そして、先生はそれを真剣に手助けしなくてはなりません。そういう意味で、武蔵野では学生も、先生方も、とてもよく努力しています。

学生たちへのアドバイスとしては、準備は十分早く始めなさいということ。試験やコンサートに際して、ギリギリになってから頑張るのではなく、時間的に余裕をもって準備を始めれば始めるほど、確実さが増し本番でのストレスは少なくなります。

それと、たとえばモスクワなどでは、レッスンがマスタークラスのような形式で行われることも多いのですが、そういう経験も大切だと思います。特に、何人もが同じ曲を学んでいる場合など、お互いに聴きあうことは良い勉強になります。演奏には、練習だけでなく、そういった人前での演奏経験が不可欠です。もちろんコンクールへの参加も含めて、ステージで弾く機会をどんどん増やすことが必要です。

またピアノの学生には、バッハをもっと勉強しなさいと言いたい。ポリフォニーをコントロールして弾き分けることなど、アカデミックな基礎をきちんと学ぶことが大切です。ロマン派の音楽や、ドビュッシー、ラヴェル、スクリャービンなども、そういう基礎を身につけた上で弾くべきです。まずは、バロック、あるいはハイドンなどを通じてテクニック、リズムなどを学ぶことです。

## 偉大な音楽家たち

ハチャトゥリアン、ネイガウスをはじめ、私の出会った偉大な人々は、皆、



どこか素朴で子供のように無邪気なところがありました。モスクワではピアノをヤコブ・ザークという先生に師事しました。またその間ギレリスにも個人的に習いました。皆、とても自然体でしたね。偉そうに威張っている人などいませんでした。

ところで、私は幼いころ、リヒテルと同じ建物に住んでいたのですよ。モスクワで「作曲家の家」と名付けられた有名な建物で、音楽院の近くにあり、作曲家のみならず大勢の音楽家が住んでいました。晩年のドキュメンタリーフィルムで、リヒテルが「2時間くらいしか練習しない」とか言っていましたが、そのころは、とてつもなくたくさん練習していましたよ。ロストロポーヴィッチやハチャトゥリアンもそこに住んでいました。

ハチャトゥリアンの晩年のドキュメンタリー映画があることは前号でも話しましたが、あの作品はみなさんに

もぜひ見て貰いたいものです。私も、もちろん出ていますよ。ハチャトゥリアンは「教えるというのは与えるということだ。与えられたものは、いずれさらに次の世代に受け渡して与えていかなければならない」という指導者としての哲学を持っていました。私自身も、これを今、実践しようと努めています。(訳:重松万里子)



▲ハチャトゥリアン

## 音楽の万華鏡⑤

### 江文也のピアノ小品

ピアノ小品と言うと、メンデルスゾーンの《無言歌集》やシューマンの《幻想小曲集》などが思い浮かびますが、それからほぼ100年後にピアノ小品に力を注いだ作曲家がいます。1930年代に日本で活躍した台湾出身の江文也（1910～1983）です。江はあらゆるジャンルの作品を書いています。生涯にわたってとりわけ多く作曲したのはピアノ小品でした。標題のついていない曲もありますが、「山田の中の一木足の案山子」「灯火にて」「ちゃるめら」「焚火を囲んで」など標題を付けたものが多いです。いずれも1分から3分ほどの曲です。

この時期の日本の作曲家たちもピアノ小品を書きましたが、江のように、それを中心的なジャンルとしているわけではありませんでした。オーケストラ作品や室内楽作品など、ピアノ小品よりも編成や形式規模の大きい作品を中心的なジャンルとして、その傍らでピアノ小品を書く、といった状況でした。日本の作曲家にとってはオーケストラ作品やオペラを頂点とし、その下に室内楽作品、ピアノ曲、歌曲がある、といったヒエラルキーがあったと思われます。

一方、江文也は、そのようなヒエラルキーとは関係なく、自身が書きたいジャンルのために書いたのでし

よう。江の書いたピアノ小品からは、タイトルに喚起されてか作曲者の想像力がはばたいて、曲ごとに個性的な楽想やピアノリズムが繰り出されます。江文也も日本の作曲家もヨーロッパの音楽をモデルに作曲を始めたのは共通していますが、自分の表現したいものを率直に表現するかどうか、に違いがあるように思われます。1930年代にはアジアの作曲家のほか、ブラジル、アルゼンチンをはじめとする南米の作曲家たちも台頭してきます。彼らはピアノ小品に何を託したのかに思いをはせると、ピアノ小品を通してピアノ音楽の大きな弧が広がってきます。

榎崎洋子

## 世界の最先端を走るモルティエ流オペラとは

### パリ国立オペラ初来日記念 モルティエ総裁講演会、 武蔵野音楽大学で開催

オペラ界に嵐を呼ぶ男、と言われるパリ国立オペラ総裁ジェラルド・モルティエさん。パリ国立オペラ初来日を記念して、7月25日、本学モーツァルトホールで講演会が開かれました。

65歳とは見えない若々しさ、時にウィットを交え1時間30分、最後には会場からの専門的な質問にも答え、オペラの今、そして今後を語り、満席の会場から大きな拍手があがりました。

パリ・オペラ座の紹介DVD上演から始まった講演は、オペラが本来持つ革新性、ユートピア性、超越性、そして今日での重要性を説き、人間



がより良く生きるためにオペラがある、伝統のオペラをいかに現代の観衆に理解させるか、がオペラディレクターの命題であると語られました。

2009年10月シーズンからニューヨーク・シティ・オペラの支配人に就任が決まっているが、最初の公演は劇場を飛び出したものになりたい、と抱負を述べられ、会場の専門家・学生には、劇場以外で公演の場を作り出して欲しいと激励されました。

## 第14回インターナショナル・サマースクール・イン・トウキョウ

東京にいながらにして、世界の第一線で活躍する教授たちによるレベルの高いレッスンが受けられると、例年人気を博している本学インターナショナル・サマースクール・イン・トウキョウが、本年も多くの熱心な受講生を集め、7月19日から29日の11日間にわたり江古田キャンパスにて開催されました。

教授陣には、今回初の招聘となったE.クズネツォフ(ピアノ、ロシア)、U.ヘルシャー(ヴァイオリン、ドイツ)、堀内康雄(声楽、日本)の各教授をはじめ、6カ国から12名の豪華メンバーが顔を揃え、それぞれ特徴のある充実したレッスンが繰り広げられま

した。

さらに、期間中にはこれらの名教授たちによるスペシャル・コンサートや公開講座も行われました。U.ヘルシャー(ヴァイオリン)、A.v.アルニム(ピアノ)両教授のデュオ・リサイタルでは、高い技術と深い音楽性で観客を魅了、また、S.シェリエ、F.レングリ両教授によるフルート・デュオ・リサイタル(伴奏:小池ちとせ本学講師)では、現代曲を中心とした多彩なプログラムを披露。それぞれ会場は大きな感動に包まれました。さらに、E.クズネツォフ教授が「ピアノ協奏曲について」をテーマに音楽セミナーを(通訳:正村和子女史)、また、国際的ブ



▲E.クズネツォフ



▲U.ヘルシャー、A.v.アルニム演奏会

リマ・ドンナ松本美和子本学特任教授が声楽の公開レッスンを展開。両日とも両女史の豊かな経験に基づく技術や知識を学ぼうと、沢山の聴衆が真剣に耳を傾けていました。

その他、教授達との懇談会や受講生によるコンサートも行われ、参加者はそれぞれ今後の勉学への大きな指針を手にした有意義な夏を過ごしました。



▲S.シェリエ、F.レングリ演奏会

## 武蔵野音楽大学チェンバーオーケストラ

武蔵野音楽大学では、学生が様々なアンサンブルを経験できる多くの機会を作っていますが、本年4月、新たに結成された“武蔵野音楽大学チェンバーオーケストラ”もその一つです。本学客員教授のクルト・グントナー教授の指導・監修のもとに、本学の若手卒業生および在学生在で編成されています。

去る7月1日、待望の第1回演奏会がベートーヴェンホールで開催されました。プログラムは、モーツァルト：ディヴェルティメント第11番 二長調K.251、シューベルト：ロンド イ長調 D.438、メンデルスゾーン：弦楽のための交響曲 第10番 ロ短調、グリーク：組曲「ホルベアの時代より」Op.40。数々の著名なオーケストラでコンサートマスターを務めてきたグントナー教授のきめ細かな指導により、伸びやかな弦の音色が生き生きと

会場に響きわたり、息の合った素晴らしいアンサンブルを披露しました。デア駐日ドイツ連邦共和国大使ご夫妻をはじめ、多くの聴衆で満員となった会場からは大きな拍手が沸き起こり、チェンバーオーケストラは新しい武蔵野の顔として今後の活躍が期待されます。



▲A.ナセトキン



## 本学合唱団 東京芸術劇場シアターオペラに出演

武蔵野音楽大学合唱団は、来る12月6日(土)に、東京芸術劇場主催公演、シアターオペラ マスカーニ：歌劇「イリス」に出演します(セミステージ形式)。「蝶々夫人」と並ぶ日本を舞台にした名作で、1984年、日本初演以来

今回が2度目の上演となります。

井上道義氏指揮・演出、管弦楽は、読売日本交響楽団、他、著名なアーティストとの共演です(詳細は14ページ演奏会のお知らせをご覧ください)。

## ウィンドアンサンブル& 管弦楽団定期演奏会、演奏旅行



▲岐阜県 サラマンカホールにて

武蔵野音楽大学ウィンドアンサンブルは、米国吹奏楽界で数多くの経歴を持ち、現ミッドウェスト・クリニック会長であるレイ・E. クレーマー教授を指揮者に招き、7月14・15日に岐阜、三重の両県において、また翌16日には東京オペラシティコンサートホールにて演奏会を開催しました。

J. ウィリアムズの「サウンド・ザ・ベルズ!」で幕を開け、「アメージング・グレイス」、バーンスタイン「ウェスト・サイド・ストーリー」の親しみ易いメロディーによるアレンジ作品や、ティケリの「ワイルド・ナイト!」、チェザリーニ「ブルガリアン・ダンス」等のバンドのためのオリジナル曲に、J.A. ギローの「ハーン」とドヴォルジャークの「フェストムジーク」の初演曲が盛り

込まれた多彩なプログラムを、柔らかく明るい武蔵野サウンドで聴かせました。さらに、水野ゆみ本学講師をソリストに、ガーシュウインの「ラブソディ・イン・ブルー」が華やかに演奏され、会場からは盛大な拍手が寄せられました。

秋の気配が漂い始める9月上旬、本学管弦楽団の一行が各地で公演を行いました。指揮者のカールマン・バルケシュ教授をはじめとする本学教授陣の熱心な指導のもとに磨きをかけたハーモニーを、9日のパツハザール(入間キャンパス)での公演を皮切りに、10日東京オペラシティコンサートホール、12日岡山シンフォニーホール、15日広島国際会議場フェニックスホールと4回にわたり繰り広げました。

ベートーヴェンの序曲「コリオラン」、ワーグナーの楽劇《トリスタンとイゾルデ》より前奏曲と「愛の死」、ストラヴィンスキーの組曲「火の鳥」(1919年版)を次々と壮麗な響きで奏で、シューマンのピアノ協奏曲では、厳しいオーディションを通過したソリスト金子 淳(大学4年/10・12・15日)、清水 綾(大学3年/9日)の両名が、これまで積み重ねた研鑽の成果を清々しく披露しました。10日には、ポハール駐日ハンガリー共和国大使が来聴されるなど、各会場とも盛況裡に終了しました。



▲東京オペラシティコンサートホールにて

## よりきれいに、快適に、学生寮改修工事

武蔵野音楽大学、同附属高校では、学生・生徒諸君の安全面、経済

面を配慮し、また共同生活を通して教育方針である「人間形成」教育を

進めるために、近年、各学寮の施設の整備・改善を行ってきました。

すでに入間キャンパス男子寮の新築、同女子寮の居室の全面リニューアル、および各室のコンセント設置等の工事は終了していますが、今春から実施している江古田キャンパスむらさき寮(女子寮)の内部美化、およびコンセント設置工事も本年夏期

休暇中に終り、入寮生の皆さんの生活環境は一層快適になりました。

さらに9月から、学寮を含む入間キャンパス、軽井沢高原研修センター、およびパルナソス多摩(多摩教育研修施設)関係の食堂を一新し、メニューも新たにサービスのグレードアップを図りました。

## 附属音楽教室夏期ミュージックキャンプ

武蔵野音楽大学附属音楽教室恒例のミュージックキャンプは、今年も豊かな自然に囲まれた本学軽井沢高原研修センターで行われました。(入間・多摩音楽教室は7月30日～8月1日、江古田音楽教室は8月2日～4日)

生徒たちは2日目に行われるコンサートに向けて、先生方の指導のもと、室内楽や合唱などの練習に励み、短期間に見違えるような上達をみせて、当日は生き生きとした素晴らしい演奏を聴かせてくれました。

また小学生から高校生まで、幅広い年齢層の子供たちが、音楽という共通基盤にあって生活を共にし、交流を深めることができるのは、この

キャンプならではの特色といえるでしょう。毎年の連続参加者も多く、音楽面でも生活面でも皆が協力し、それぞれに自分の役割を立派に果たした3日間でした。



## 武蔵野音楽学園ホームページの リニューアルと携帯サイト新規オープン

武蔵野音楽学園のホームページがリニューアルされました。今回は、学園、大学、附属高等学校の必要な情報を探しやすいページ作りを心がけ、訪問者別メニューを用意した他、演奏会のチケット予約、各種講習会の申し込みなど、より利便性を上げ、皆様にとって使いやすいホームページとなるように改善いたしました。( <http://www.musashino-music.ac.jp/> )

さらに、いつでも気軽にアクセスできる武蔵野音楽大学、附属高等学校の携帯サイトもオープン。ここでは各学部・学校紹介、入学試験、コンサート・公開講座、各種講習会などの情報が手軽に得られる他、大学説明会・クリニックのお申し込みや資料請求が可能です。ぜひご利用ください。

( <http://musaon.jp/> )



# MUSASHINO NEWS

## 着任外国人教授紹介 (平成20年度後期)

### アルヌルフ・フォン・アルニム ● Arnulf von Arnim (ピアノ/ドイツ)



フランクフルト音楽大学に学び、パリにてP.サンカンに師事。マリア・カナルス及びヴィオッティ両国際コンクール第1位、プゾーニ国際コンクール第3位。国際シュベルトコンクール音楽監督をはじめ、数々の国際コンクールにて審査員を務める。世界各地で演奏活動及び講習会を行う。現在、エッセン・フォルクヴァング音楽大学教授。

### エレナ・オブラズツォフ ●Elena Obraztsova (声楽/ロシア)



レニングラード音楽院に学ぶ。チャイコフスキー国際コンクール優勝ほか受賞多数。世界各地の歌劇場で絶賛を浴び、オペラ歌手として不動の地位を獲得、現在も国際的に活躍中。ロシア共和国国家芸術家の称号及びレニン勲章を授与される。現在、オブラズツォフ国際声楽コンクール総裁、ムソルグスキー記念サンクトペテルブルク国立ミハイロフスキー歌劇場の芸術監督。

### ドン・ウィルクックス ●Don Wilcox (ウィンドアンサンブル指揮/アメリカ)



カリフォルニア州立大学卒業後、同校のバンド・ディレクターとなり、その後ウェスト・ヴァージニア大学のバンド・ディレクターを34年間務め、その間、アメリカ全土、カナダ、ヨーロッパ各国で多数のコンサートを行い高い評価を得ている。またアメリカバンド指導者協会の会長も務めた。2006年には本学のアメリカ演奏旅行にゲストコンダクターとして参加している。ウェスト・ヴァージニア大学名誉バンド・ディレクター。

### ヴァインフリート・トル ●Winfried Toll (合唱指揮/ドイツ)



ミュンスターおよびフライブルグで哲学と神学を学び、その後、作曲、音楽理論、音楽教育、声楽、指揮法を学ぶ。これまでに多くの作曲コンクールで受賞している他、委嘱作品の作曲などを数多く行っている。また合唱団、放送、音楽祭などで指揮者、作曲家として活躍している。フランクフルト音楽大学教授。

### ジェレミー・ヒュリン ●Jeremy Hulin (合唱指導/イギリス)



ロンドンでクラリネットをジェルヴァース・ドゥ・ペイ工に師事。ケンブリッジ大学で、音楽学、作曲を専攻。また、ロンドン、ギルドホール音楽院指揮科で指揮をヴィレム・タウスキに、ベルリン芸術大学指揮科でハンス・マルティン・ラベンシュタインに師事。卒業と同時にドイツ、ウルム市劇場の専属指揮者に就任。その後ヨーロッパ各地の歌劇場、合唱団で指揮者として活躍し活発な演奏活動を行っている。1998年よりオランダのマーストリヒ音楽大学教授、2005年歌劇科主任に就任。

### インゴ・ゴリツキー ●Ingo Goritzki (オーボエ/ドイツ)



バーミンガム、ブラハ、ジュネーヴなど国際音楽コンクールで上位入賞。バーゼル交響楽団及びフランクフルト放送管弦楽団で首席オーボエ奏者を務める。10年間のオーケストラ活動後、ハノーファー音楽大学及びシュトゥットガルト音楽大学にて教授として勤務。ソリストとして国内外の幾多のオーケストラと共演。2002年ロットヴァイル文化財団芸術賞受賞。

13

## 栄冠おめでとう! (コンクール入賞者等)

(前号までの未掲載分、順不同、敬称略、経歴は受賞時のもの)

●恩田 文江(平成17年大学卒ピアノ専攻) アディリア・アリエヴァ国際ピアノコンクール(フランス) 第2位入賞 ●渡邊 愛美(平成15年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程修了) 第44回 日伊声楽コンクール 入選 ●津田 りつ子(大学2年次在学打楽器専攻) 第4回 ルーマニア国際音楽コンクール 打楽器部門 第3位入賞 ●崎崎 雄斗(大学3年次在学マリンバ専攻) 第13回 JILA 音楽コンクール 打楽器部門(マリンバ) 第2位入賞 ●久保田 恵理(大学3年次在学ピアノ専攻) 第13回 JILA 音楽コンクール ピアノ部門 第2位入賞 ●飯島 正徳(平成20年大学卒ピアノ専攻 本高等学校卒 本大学院修士課程1年次在学) 第34回 茨城県新人演奏会 奨励賞受賞 ●竹中 千絵(大学3年次在学ピアノ専攻) 第4回 ブルクハルト国際音楽コンクール ピアノ部門 第3位入賞(1位なし)、第2回 横浜国際ピアノコンクール 特別賞・ウィスタリアピアノ賞受賞 ●荒井 茉莉奈(大学2年次在学ピアノ専攻) 第4回 ブルクハルト国際音楽コンクール ピアノ部門 第4位入賞(1位なし) ●矢澤 知嘉子(平成10年大学卒声楽専攻) 第4回 ブルクハルト国際音楽コンクール 声楽部門 第4位入賞(1~3位なし)、第13回 JILA 音楽コンクール 声楽部門 第3位入賞 ●山内 詞音(大学2年次在学オーボエ専攻) 第4回 ブルクハルト国際音楽コンクール 管楽器部門 審査員賞受賞、第13回 JILA 音楽コンクール 管楽器部門 入選 ●藤平 華子(平成20年大学卒ピアノ専攻 本大学院修士課程1年次在学音楽教育専攻) 第4回 ブルクハルト国際音楽コンクール ピアノ部門 奨励賞受賞 ●秋山 祐子(平成20年大学卒ピアノ専攻 本大学院修士課程1年次在学) 第4回 ブルクハルト国際音楽コンクール ピアノ部門 奨励賞受賞 ●前田 菜々子(大学3年次在学ピアノ専攻) 第10回 "万里の長城杯" 国際音楽コンクール ピアノ部門 大学の部 第3位入賞、第11回 ベトロフピアノコンクール 大学・一般部門 審査員特別賞受賞、第8回 21世紀ピアノコンクール ソロ部門 入選 ●阿久澤 政行(平成20年大学卒ピアノ専攻 本大学院修士課程1年次在学) 第40回 国際芸術連盟新人オーディション ピアノ部門 合格、最優秀新人賞受賞 ●堀部 祥子(平成19年大学卒ピアノ専攻) 第40回 国際芸術連盟新人オーディション ピアノ部門 合格、及川音楽事務所 第12回 新人オーディション(コロムビアアタイアップ部門)合格、審査員賞受賞 ●瀬戸 晶子(平成7年大学卒ピアノ専攻 本高等学校卒 本特修科修了) 及川音楽事務所 第13回 新人オーディション 奨励賞受賞、第18回 ANP全日本ソリスト・コンクール 入選 ●古澤 万里子(平成17年大学卒フルート専攻) 第18回 ANP全日本ソリスト・コンクール 入選 ●川津 めぐみ(平成19年大学卒ピアノ専攻 本大学院修士課程2年次在学) 2008年度 家永ピアノ・オーディション 合格、披露演奏会に出演 ●大島 弓人(附属古田音楽教室在室 越谷市立桜井小学校3年生) 第10回 "万里の長城杯" 国際音楽コンクール 弦楽器部門 小学校Aの部 第3位入賞(1位なし)

## 平成21年度入学試験要項請求について

武蔵野音楽大学の各入学試験要項は、江古田キャンパスで取り扱っています。

要項は無料ですが、郵送をご希望の場合は、氏名、住所、電話番号、および附属高校、大学1年次、大学3年次編・転入、大学院の別を明記し、切手(高校は240円・大学1年次

は390円、大学3年次は240円、大学院は390円)を同封の上、下記までお申し込みください。

武蔵野音楽学園広報企画室

〒176-8521 東京都練馬区羽沢1-13-1 TEL.03-3992-1125

学園のホームページ、携帯サイトからも請求ができます。

http://www.musashino-music.ac.jp/ 携帯サイト http://musaon.jp/

## 平成20年度10月～12月公開講座・演奏会のお知らせ

### 公開講座・演奏会

武蔵野音楽大学附属高等学校音楽科 在校生と新卒業生によるコンサート

	10月 1日 ㊦	18:30	王子ホール	¥2,000(全席自由)
武蔵野音楽大学室内合唱団演奏会	10月 6日 ㊦	18:30	ベートーヴェンホール(江古田)	¥1,000(全席自由)
指揮=ヴァインフリート・トル 曲目=ブラームス:ドイツ・レクイエム Op.45～連弾ピアノ伴奏による～				
エレナ・オブラストゾワ メゾ・ソプラノ・リサイタル	10月20日 ㊦	19:00	シューベルトホール(多摩)	¥3,000(全席自由)
ピアノ=瀧田亮子 曲目=ドビュッシー:「忘れられた小歌」より 他				
アブデル・ラーマン・エル=バシャ ピアノ・リサイタル	10月23日 ㊦	18:30	ベートーヴェンホール(江古田)	¥1,000(全席自由)
曲目=ベートーヴェン:ピアノ・ソナタ Op.10-1,2,3 他				
インゴ・ゴリツキー オーボエ・リサイタル	11月10日 ㊦	18:30	ベートーヴェンホール(江古田)	¥1,000(全席自由)
オーボエ=青山聖樹 ファゴット=岡崎耕治 コントラバス=ツォルト・ティバイ チェンバロ/ピアノ=岡崎悦子 曲目=ヘンデル:トリオソナタ 二長調 他				
学生による室内楽の夕べ	11月12日 ㊦	18:30	大泉学園ゆめりあホール	¥1,000(全席自由)
アルヌルフ・フォン・アルニム ピアノ・リサイタル	11月13日 ㊦	18:00	バッハザール(入間)	¥1,000(全席自由)
曲目=シューマン:ダヴィッド同盟舞曲集 Op.6 他				
インゴ・ゴリツキー オーボエ公開セミナー	11月14日 ㊦	18:30	447室(江古田)	¥1,000(全席自由)
通訳=青山聖樹				
ニュー・ストリーム・コンサートⅧ ～ヴィルトゥオーソ学科演奏会3～	11月15日 ㊦	18:30	トッパンホール	¥2,000(全席自由)
カールマン・ベルケシュ クラリネット・リサイタル	11月19日 ㊦	18:30	ベートーヴェンホール(江古田)	¥1,000(全席自由)
ヴァイオリン=飯島多恵、増田加寿子 ヴィオラ=シャンドール・ナジ チェロ=前田善彦 ピアノ=春原恵子 曲目=モーツァルト:クラリネット五重奏曲 イ長調 K.581「シュタードラー」 他				
武蔵野音楽大学シンフォニック ウィンド オーケストラ演奏会	11月28日 ㊦	18:30	バッハザール(入間)	一般¥1,500/小中高¥1,000(全席自由)
指揮=前田 淳 曲目=リード:アルメリアン・ダンス パート1 他				
アメリカ合衆国沿岸警備隊バンド演奏会	12月 3日 ㊦	18:30	ベートーヴェンホール(江古田)	¥1,000(全席自由)
東京芸術劇場 シアターオペラ Vol.3(主催:東京芸術劇場)	12月 6日 ㊦	18:00	東京芸術劇場 大ホール	
曲目=マスカーニ:歌劇「イリス」(セミステージ形式) 指揮・演出=井上道義 管弦楽=読売日本交響楽団 合唱=武蔵野音楽大学 ※有料。お問い合わせは東京芸術劇場音楽係 (TEL.03-5391-2111)				
武蔵野音楽大学管弦楽団合唱団演奏会	12月 9日 ㊦	19:00	東京芸術劇場 大ホール	¥2,000(全席指定)
指揮=北原幸男				
独唱=山口道子(Sop.)/森永朝子(Alt.)/水口 聡(Ten.)/谷 友博(Bar.)	12月10日 ㊦	18:30	バッハザール(入間)	¥2,000(指定席)
合唱指導・指揮=松井 徹/ジェレミー・ヒュリン 曲目=ベートーヴェン:交響曲 第9番 二短調 Op.125「合唱付き」 他				
武蔵野音楽大学ウィンドアンサンブル演奏会	12月16日 ㊦	18:30	東京オペラシティ コンサートホール	A席¥2,000/B席¥1,500(全席指定)
指揮=ドン・ウィルクックス				
練馬区文化芸術振興支援事業	12月20日 ㊦	14:00	練馬文化センター 大ホール	
武蔵野音楽大学ウィンドアンサンブル演奏会(主催:練馬区)	指揮=ドン・ウィルクックス			

お問い合わせ ●武蔵野音楽大学江古田キャンパス演奏部 TEL.03-3992-1120 ●武蔵野音楽大学入間キャンパス演奏部 TEL.04-2932-3108

※講師の病気、その他やむを得ない事情により、内容を変更する場合がありますので、あらかじめご了承ください。

### 武蔵野音楽大学・附属高等学校 平成20年度冬期講習会のお知らせ

音楽大学受験講習会:平成20年12月23日(火)～26日(金)

高校音楽科受験講習会:平成20年12月24日(水)～26日(金)

申込期間:大学 平成20年11月12日(水)～12月3日(水) 高校 平成20年11月12日(水)～12月5日(金)

会場:武蔵野音楽大学江古田キャンパス

要項請求:直接広報企画室へ、またはホームページ、携帯サイトにてお申し込みください。

講習会要項は無料、郵送料は学園が負担します。

お問い合わせ・お申し込み:武蔵野音楽学園広報企画室 TEL.03-3992-1125

ホームページアドレス: <http://www.musashino-music.ac.jp/>

携帯サイト <http://musaon.jp/>

### ●編集後記●

暑い、オリンピックの夏が終わりました。今号の巻頭を飾っていただいたのは、女子マラソン連続メダルに輝いた有森さん。「才能なき者、努力するのみ」の言葉は、自らを才能なき者と規定した上で、ほとぼしるような人生にたいする「想い」が込められています(編)。



武蔵野音楽大学楽器博物館だより

## ヘッケルフォン

ヘッケル作 1906年 ドイツ 全長112cm

ヘッケルフォンは、大作曲家ヴァーグナーの提案により、ドイツの楽器製作者ヴィルヘルム・ヘッケルが考案した、バリトン音域のダブル・リード楽器である。

1905年に書かれたヘッケルの手記によれば、1879年、パイロイトに滞在していたヘッケルに、ヴァーグナーは「オーボエより1オクターヴ低い音域において、オーボエのように柔らかな音色で、アルプホルンのように力強い音を持つダブル・リード楽器が欠けており残念に思っている」と話した。この言葉に23歳の若きヘッケルは創作意欲を掻き立てられた。彼はそのような楽器には大きな空気柱が必要と考え、1904年に広い円錐形の内径を持つ新たな楽器を完成させた。しかし、ヴァーグナーはすでに世を去っていた。この楽器が初めて使用されたのはリヒャルト・シュトラウス作曲のオペラ「サロメ」で、この作曲家はヘッケルフォンを高く評価し、オペラ「エレクトラ」や「アルプス交響曲」などでも活用している。

ヘッケルフォンはその後ヒンデミットや現代作曲家らにより使用されたが、それほど普及せず今日に至っている。この楽器はバス・オーボエの代用としても使われ、ホルスト作曲組曲「惑星」の演奏で、しばしばその例が見られる。現在までに約150本が製作され、1955年以降はほとんどがコンセルヴァトワール方式のキイシステムで作られている。写真の楽器はドイツシステムで作られた初期の希少な資料である。

(武蔵野音楽大学楽器博物館所蔵)

### ●目次●

才能なき者、努力するのみ ..... ①  
有森裕子

音楽余話 ..... ⑤  
誰だかわからなかったが、言うままに指を動かしたモシェルス

海外音楽事情 ..... ⑥  
ハチャトゥリアンの薫陶を受けて  
コンスタンティン・シロウニアン

音楽の万華鏡 ..... ⑧  
江文也のピアノ小品

MUSASHINO NEWS ..... ⑨

- 世界の最先端を走るモルティエ流オペラとは
- 第14回インターナショナル・サマースクール・イン・トウキョウ
- 武蔵野音楽大学チェンバーオーケストラ
- 本学合唱団 東京芸術劇場シアターオペラに出演
- ウィンドアンサンブル&管弦楽団定期演奏会、演奏旅行
- よりきれいに、快適に、学生寮改修工事
- 附属音楽教室夏期ミュージックキャンプ
- 武蔵野音楽学園ホームページのリニューアルと携帯サイト新規オープン
- 着任外国人教授紹介
- 栄冠おめでとう！（コンクール入賞者等）
- 平成21年度入学試験要項請求について
- 平成20年度10月～12月公開講座・演奏会のお知らせ
- 平成20年度冬期講習会のお知らせ

## 武蔵野音楽大学大学院

博士前期課程・博士後期課程

## 武蔵野音楽大学

## 武蔵野音楽大学附属高等学校

## 武蔵野音楽大学第一幼稚園

## 武蔵野音楽大学第二幼稚園

## 武蔵野音楽大学武蔵野幼稚園

## 附属音楽教室 江古田・入間・多摩

発行

## 学校法人 武蔵野音楽学園

江古田キャンパス ●〒176-8521 東京都練馬区羽沢1丁目13-1

TEL.03-3992-1121 (代表)

入間キャンパス ●〒358-8521 埼玉県入間市中神728

TEL.04-2932-2111 (代表)

パルナソス多摩 ●〒206-0033 東京都多摩市落合5-7-1

TEL.042-389-0711 (代表)

<http://www.musashino-music.ac.jp/>

2008年10月1日発行 通巻第87号



携帯サイト  
<http://musaon.jp/>